島津氏の虚空蔵信仰

―安房国清澄寺を中心に―

栗林文夫

はじめに

黎明館調査史料室では『鹿児島県史料』編纂の際の参考資料とするために、鹿児島県に関係する古文書の所在調査を長年継続して実施している。本稿では筆者が関わった千葉県鴨川市の清澄寺文書[1]の調査結果を報告する。

清澄寺は房総半島の南端、千葉県鴨川市清澄に所在する（旧町名は安房郡天津小湊町、二〇〇五年に鴨川市と合併）。この寺は日蓮の出家得度・立教開宗の地として著名である。千光山と号し、本尊は十界曼荼羅、本堂には日蓮が願をかけたといわれる虚空蔵菩薩が安置される。清澄寺の虚空蔵は、明治三五年（一九〇二）五月に作成された『清澄寺什宝録』によれば、木像で宝亀二年（七七一）不思議法師の作と伝えられているが、実際は正徳六年（一七一六）に清澄寺八世乗栄法印の依頼により天瑞和尚が自ら作成したものであるという。[2]この虚空蔵菩薩は日本三虚空蔵の一つといわれ、[3]清澄寺は身延山久遠寺・池上本門寺・誕生寺等とともに日蓮宗四霊場とされる。

千光山清澄寺

寺伝によれば、宝亀二年不思議法師が虚空蔵菩薩を刻んで小堂を営んだのが始まりとされ、承和三年（八三六）には慈覚大師（円仁）が中興となり山容を整え、天台宗に改めたという。江戸時代初期に、仲恩坊頼勢法印が徳川家康の帰依を受け清澄寺を賜ったことから新義真言宗となり、醍醐寺地蔵院、のち同寺三宝院末となる。一九四九年に日蓮宗に帰属し現在に至っている。[4]

そもそも筆者が清澄寺文書の存在を知るに至ったきっかけは、二〇〇五年二月二四・二五日に千葉県佐倉市の重富（越前）島津家資料の調査の際に、故島津晴久氏より情報をいただいたことによる。その後、機会を得て二〇〇八年七月一日～三日にかけて現地での調査を実施した。一・二日は鴨川市郷土資料館・文化財センター（以下、郷土資料館と略記する）にて、三日は大本山清澄寺で調査を行った。郷土資料館では清澄寺文書の目録・文書のコピー・筆写原稿等を閲覧した。清澄寺では前日までに得られた知見をもとに文書原本の調査を実施した。ここでは郷土資料館では見られなかった文書の断簡数通が新たに発見された。

『天津小湊町史史料集1』編纂のために作成された清澄寺文書目録（郷土資料館蔵）によると、清澄寺文書全二二七点のうち、島津氏に関わる文書は八八点あり、実に清澄寺文書全体の三八・七％を占める。これに清澄寺での原本調査で見出した数点を加えると、この割合は更に高くなる。[5]

右の清澄寺文書目録を参考にして、清澄寺での原本調査の成果を加味し、新たに島津氏関連清澄寺文書目録を作成してみた。それが【表1】である。この内、「鴨川目録No.」というのは、郷土資料館所蔵の清澄寺

68	（島津斉彬他祈祷料奉納目録）				状	1	171	B	最華金弐百疋宛
69	（島津斉彬他祈祷料奉納目録）				状	1	172	B	銀三枚
70	（島津斉彬他祈祷料奉納目録）				状	1	174	B	最華金弐百疋ヅヽ
71	（島津斉彬他祈祷料奉納目録）				状	1	175	B	最華金弐百疋宛
72	覚（島津家初穂金寄進に付書状）	卯４月３日	薩摩守内善輪		状	1	90	B	御初穂金弐百疋宛
73	覚（島津惟久夫人於松祈祷料目録）	亥３月	松平薩摩守内深長		状	1	58	B	御初穂金百疋
74	（島津斉宣他９名祈祷料落手に付書状）	寅３月16日	清澄寺	御使者中	状	1	87	C	合計金九百疋
75	覚（島津斉興他５名祈祷料落手に付書状）	（天保14年：1843）卯３月３日	清澄寺	薩州御使者中	状	1	88	C	16に対する請取状．御初尾銀三枚．御札守五通．御守壱通
76	覚（島津斉興他５名祈祷料落手に付書状）	（天保14年：1843）卯３月３日	清澄寺快殿	赤松主水（則甫）	状	1	89	C	16に対する請取状．御札守五通．御初尾銀三枚
77	覚（島津斉興他16名祈祷料落手に付書状）	丑３月16日	清澄寺	薩州御使者中	状	1	84	C	金千六百疋
78	（島津斉興祈祷料落手に付書状）	３月16日	清澄寺快雅	猪飼央（尚敏）・調所笑左衛門（広郷）	状	1	125	C	48に対する請取状
79	覚（島津斉興他９名祈祷料落手に付書状）				状	1	157	C	御札守九通．御初尾銀三枚
80	（島津斉興祈祷料落手に付書状）	４月４日	清澄寺快殿	赤松主水（則甫）	状	1	134	C	
81	（島津斉興祈祷料落手に付書状）	３月　日	清澄寺快殿	赤松主水（則甫）	状	1		C	
82	（島津斉興祈祷料落手に付書状）	３月16日	清澄寺快雅	猪飼央（尚敏）	状	1		C	
83	（島津斉興祈祷料落手に付書状）	子３月17日	清澄寺	薩州御使者中	状	1		C	前欠．御初尾銀三枚．御守壱通（北郷内記へ）
84	（島津斉彬祈祷料落手に付書状）	（嘉永５年：1852）３月15日	清澄寺快殿	川上筑後（久封）	状	1	124	C	19に対する請取状
85	（島津斉彬祈祷料落手に付書状）	３月16日	清澄寺院代快生	川上筑後（久封）・島津豊後（久宝）	状	1	126	C	
86	薩州様（島津斉興）御代参献立	嘉永２年（1849）３月15日			状	1	77	D	
87	薩州様（島津斉彬）御代参献立覚	嘉永7年（1854）３月15日	千光山納所		冊	1	79	D	
88	（島津斉彬御代参献立）	安政２年（1855）３月15日			状	1	80	D	
89	（島津重豪祈祷依頼に付書状）	宝暦９年（1759）４月３日	樺山左京（久智）	安房清澄寺	包紙	1			本文欠
90	（島津重豪祈祷依頼に付書状）	明和6年（1769）４月14日	川田伊織（国福）	安房清澄寺	包紙	1			本文欠
91	（島津斉彬他祈祷料奉納目録）				状	1			最華金弐百疋宛
92	諸檀御代参之帳（貞享４年12月から元禄15年３月まで）	貞享５年（1688）正月吉祥日	（当住頼誉）		冊	1	31		

【表１】島津氏関連清澄寺文書目録

文書目録の番号を示す。「タイプ」というのは、筆者が文書の型式を分類したもので、便宜上ここではA・B・C・Dの四つのタイプに分類した。それぞれの内容については後述する。目録中に見える丸括弧は文書そのものには見えないが、筆者が補った箇所になる。

一　諸檀御代参之帳

【表１】のNo.91までは、殆どがいわゆる一紙文書で、島津家と清澄寺の間で授受された文書である。これに対し、No.92は貞享五年（一六八八）正月、清澄寺の当時の住職頼誉がまとめた史料で、横折帳の形態をとる。

内容は、清澄寺に初尾（穂）を寄進した檀那達の名を書き連ね（島津氏以外の檀那も見られる）、それに対して守や札を与えたことが毎年詳細に記載されている。書かれた年代は貞享四年から享保二〇年（一七三五）までで、最初から元禄一五年（一七〇二）までは毎年、元禄一五年から年代が飛んで享保二〇年で終了している。頼誉が貞享五年に表紙をつけて書き始めてから、代々書き足されていったものであろう。

このNo.92の内容をまとめたのが【表２】である。以下、この表をもとに検討を加えていきたい。

奉納の時期　No.1・8・11以外は全て三月に寄進が行われている。三月のなかでも中旬以降に比較的集中しており、これはおそらく彼岸の時期を意識しての寄進と思われる。

島津氏と清澄寺との関係　No.1の貞享四年極月二六日というのが、現段階で史料から確認出来る両者の関係の嚆矢である。

No.	文　書　名	年月日	差出人	受取人	形態	数量	鴨川目録No.	タイプ	備　考
1	（島津吉貴祈祷依頼に付書状）	（宝永７年：1710）３月17日	島津大蔵久明	房州清澄寺御同宿中	状	1	60	A	代僧壱人・家来野村源左衛門
2	（島津吉貴祈祷依頼に付書状）	丑３月21日	島津帯刀伸休	清澄寺御同宿中	状	1	85	A	代参僧一人并家来小林中太兵衛
3	（島津吉貴祈祷依頼に付書状）	３月９日	北郷作左衛門久嘉	清澄寺	状	1	104	A	代参僧一人
4	（島津吉貴祈祷依頼に付書状）	３月23日	島津帯刀伸休	清澄寺	状	1	132	A	
5	（島津継豊祈祷依頼に付書状）	２月２日	島津歩久武	安房清澄寺	状	1	99	A	代参僧一人
6	（島津継豊祈祷依頼に付書状）	２月８日	島津大蔵久春	安房清澄寺	状	1	100	A	代参僧一人
7	（島津継豊祈祷依頼に付書状）	３月６日	伊集院蔵人久矩	安房清澄寺	状	1	102	A	代参僧一人
8	（島津継豊祈祷依頼に付書状）	３月７日	島津内膳久兵	清澄寺	状	1	103	A	代参僧一人
9	（島津重豪祈祷依頼に付書状）	安永６年（1777）６月３日	山岡市正久澄	清澄寺	状	1	55	A	本紙と包紙の月日が不一致，年が異なるか？
10	（島津重豪祈祷依頼に付書状）	安永７年（1778）３月16日	喜入主馬久福	清澄寺	状	1	56	A	
11	（島津重豪祈祷依頼に付書状）	明和８年（1771）３月19日	島津左中久金	安房清澄寺	状	1	57	A	代僧壱人・家来二階堂新十郎
12	（島津重豪祈祷依頼に付書状）	３月22日	喜入主馬久福	安房清澄寺	状	1	130	A	
13	（島津重豪祈祷依頼に付書状）	５月６日	島津左中久金	安房清澄寺	状	1	135	A	
14	（島津斉宣祈祷依頼に付書状）	文化元年（1804）３月13日	市田勘解由盛常	清澄寺	状	1	63	A	
15	（島津斉宣祈祷依頼に付書状）	３月13日	川上右近久芳	安房清澄寺	状	1	112	A	
16	（島津斉宣祈祷依頼に付書状）	３月13日	市田勘解由盛常	清澄寺	状	1	105	A	
17	（島津斉興祈祷依頼に付書状）	文政5年（1822）3月13日	川上美濃久芳	安房清澄寺	状	1	71	A	
18	（島津斉興祈祷依頼に付書状）	天保13年（1842）3月13日	調所笑左衛門広郷	安房清澄寺	状	1	74	A	御使者角地金太郎・西助市
19	（島津斉興祈祷依頼に付書状）	天保14年（1843）3月１日	赤松主水則甫	清澄寺	状	1	75	A	薩州家御使者山内伝太郎・有川良右衛門
20	（島津斉興祈祷依頼に付書状）	３月13日	鎌田典膳政輿	安房清澄寺	状	1	106	A	
21	（島津斉興祈祷依頼に付書状）	３月13日	鎌田典膳政輿	安房清澄寺	状	1	107	A	
22	（島津斉興祈祷依頼に付書状）	３月13日	川上右近久芳	安房清澄寺	状	1	110	A	
23	（島津斉興祈祷依頼に付書状）	３月13日	川上久馬久芳	安房清澄寺	状	1	111	A	
24	（島津斉興祈祷依頼に付書状）	３月13日	町田監物久祝	清澄寺	状	1	113	A	
25	（島津斉興祈祷依頼に付書状）	３月13日	新納内蔵久命	安房清澄寺	状	1	114	A	
26	（島津斉興祈祷依頼に付書状）	３月13日	赤松主水則甫	清澄寺	状	1	117	A	
27	（島津斉興祈祷依頼に付書状）	３月13日	調所笑左衛門広郷 島津石見久浮	清澄寺	状	1	118	A	
28	（島津斉興祈祷依頼に付書状）	３月13日	猪飼央尚敏	清澄寺	状	1	119	A	御使者富田利右衛門・田中八百助
29	（島津斉興祈祷依頼に付書状）	３月13日	調所笑左衛門広郷 猪飼央尚敏	清澄寺	状	1	120	A	
30	（島津斉興祈祷依頼に付書状）	弘化5年（1848）3月13日	島津将曹久徳	清澄寺	状	1	121	A	代参白石伸太郎・大迫善兵衛
31	（島津斉興祈祷依頼に付書状）	３月13日	猪飼央尚敏・市田美作義貞	清澄寺	状	1	122	A	
32	（島津斉興祈祷依頼に付書状）	３月13日	島津豊後久宝	清澄寺	状	1	123	A	
33	（島津斉彬祈祷依頼に付書状）	嘉永5年（1852）3月13日	川上筑後久封	清澄寺	状	1	78	A	大迫造太・上村平助
34	（島津斉彬祈祷依頼に付書状）	３月13日	末川近江久平	清澄寺	状	1	116	A	
35	（松平薩摩守祈祷依頼に付書状）	子３月14日	島津将監久尚	清澄寺御同宿中	状	1	76	A	代参僧一人并家来三原善兵衛
36	（松平豊後守祈祷依頼に付書状）	３月13日	上野帯刀篤貴	安房清澄寺	状	1	109	A	
37	（松平薩摩守祈祷依頼に付書状）	３月13日	市田勘解由盛常	安房清澄寺	状	1	115	A	
38	御初穂奉納日記（島津継豊他祈祷依頼に付）	（寛保２年：1742）戌４月			冊	1	98	B	金千百疋，白銀一色
39	覚（島津重豪他祈祷料奉納日録）	（宝暦14年：1764）３月20日	松平薩摩守代参深雪	御役僧	状	1	127	B	御初尾金六百疋
40	覚（島津重豪祈祷料奉納日録）	３月20日	松平薩摩守代参深雪	御役僧	状	1	128	B	御初尾金弐百疋
41	覚（島津重豪他２名祈祷料日録）	３月23日	松平薩摩守内嘲観	（清澄寺）	状	1	131	B	御初穂金四百疋
42	（島津斉宣他祈祷料奉納日録）	文化元年（1804）３月15日			状	1	64	B	最華金百疋宛
43	（島津斉宣他祈祷料奉納日録）				状	1	170	B	最華金百疋宛
44	（島津斉宣他祈祷料奉納日録）				状	1	173	B	金子百疋充
45	（島津斉宣他祈祷料奉納日録－後欠）				状	1	180	B	最華金百疋充
46	（島津斉興他祈祷料奉納日録）	文化９年（1812）３月15日			状	1	65	B	金子百疋ツヽ
47	（島津斉興他祈祷料奉納日録）	文化10年（1813）３月15日			状	1	66	B	金子百疋宛
48	（島津斉興他祈祷料奉納日録）	文化12年（1815）３月15日			状	1	67	B	金子百疋宛
49	（島津斉興他祈祷料奉納日録）	文化13年（1816）３月15日			状	1	68	B	金子百疋宛
50	（島津斉興他祈祷料奉納日録）	文政３年（1820）３月15日			状	1	69	B	銀三枚
51	（島津斉興他祈祷料奉納日録）	寅３月15日			状	1	86	B	金子百疋ツヽ
52	（島津斉興他祈祷料奉納日録）				状	1	158	B	銀三枚
53	（島津斉興他祈祷料奉納日録）				状	1	159	B	銀三枚
54	（島津斉興他祈祷料奉納日録）				状	1	160	B	銀三枚
55	（島津斉興他祈祷料奉納日録）				状	1	161	B	銀三枚
56	（島津斉興他祈祷料奉納日録）				状	1	162	B	銀三枚
57	（島津斉興他祈祷料奉納日録）				状	1	163	B	銀三枚
58	（島津斉興他祈祷料奉納日録）				状	1	164	B	銀三枚
59	（島津斉興他祈祷料奉納日録）				状	1	165	B	銀三枚
60	（島津斉興他祈祷料奉納日録）				状	1	166	B	銀三枚
61	（島津斉興他祈祷料奉納日録）				状	1	167	B	銀三枚
62	（島津斉興他祈祷料奉納日録）				状	1	168	B	銀三枚
63	（島津斉興他祈祷料奉納日録）				状	1	176	B	銀三枚
64	（島津斉興他祈祷料奉納日録）				状	1	177	B	銀三枚
65	（島津斉興他祈祷料奉納日録）				状	1	178	B	銀三枚
66	（島津斉興他祈祷料奉納日録）				状	1	179	B	銀三枚
67	（島津斉彬他祈祷料奉納日録）				状	1	169	B	銀三枚

10	元禄９年（1696）３月24日	島津綱貴・吉貴・久儔（各金弐分），久方・陽和院・御部屋様・吉貴の御前様・かつ姫（各金壱分），亀姫（銀十二匁）・代参深双房（青銅三百文）・下河辺玄益（心経・薬）		深双房	秘仏・御札（綱貴・吉貴・久儔・忠直・久方・陽和院・御部屋・吉貴御前様・かつ姫・子息・亀姫・綱貴ノ御奥），秘仏（祢寝孫左衛門清雄・深双房・下河辺玄益）		忠直・子息・綱貴の奥様等の初尾参らず
11	元禄９年（1696）４月29日	代参島津左衛門（初尾金壱分）		卜慶		御札・秘仏（島津左衛門），護摩札（卜慶）	
12	元禄10年（1697）３月５日	島津綱貴・吉貴（各金子弐分），又八郎（久儔子，壱分）久方・清純・陽和院・綱貴奥様・吉貴御前様・かつ姫・御へ屋様（各壱分），下河辺玄益（拾弐文焼銭・心経壱巻）		春山房	外に御初尾銭五百文	秘仏・御札（綱貴，吉貴，又八郎，久方，清純，陽和院，綱貴奥様，吉貴御前様かつ姫，かつ姫子息豊松・進次郎，御へ屋様，亀姫，島津作兵衛息女），疱瘡之御守八ツ・秘仏（家老・春山房），護摩之札弐拾枚・御札（下河辺玄益）	豊松・進次郎・亀姫・島津作兵衛息女等は初尾を進上せず
13	元禄11年（1698）３月15日	島津綱貴・又八郎・久方・清純・於菟姫（初尾金七拾），陽和院（初尾百疋），亀姫（初尾拾弐匁），高輪屋敷御前様・同御部屋様・芝屋敷御前様（各初尾百疋），鳥居播磨守忠救・同奥様・熊次郎・姫様・豊松（御初尾百疋）		快心房		御札守・秘仏（綱貴・又八郎・久方・清純・於菟姫・御前様・若子様，陽和院・亀姫，高輪屋敷御前様・同御部屋様，芝屋敷御前様，鳥居忠救・同奥様・熊次郎・姫様・豊松），秘仏（祢寝丹波清雄・快心房）	
14	元禄12年（1699）３月24日			探然房智沙房	初尾金三両壱分，外弐百疋（又八郎立願），銀拾三匁	御札守（綱貴・御前様・吉貴・御前様・又八郎・陽和院・久方・清純・若子様・お部屋様・亀姫・お菟姫・お方，島津左京亮・奥様・姫様，鳥居忠救・奥様・豊松・熊次郎・姫様），札（下河辺玄益）	
15	元禄13年（1700）３月18日	島津綱貴・又八郎（金子拾五切内弐切ツツ），吉貴・久方・清純・お菟姫・久東・お方・又之丞・芝御前様・智性院・高輪御前様（壱分ツツ），鳥居忠救・奥様・豊松・熊次郎・お栄（壱切），陽和院（金子壱分），亀姫（銀拾弐匁）		円立房		御札守，秘仏（家老新納美作久珍・円立房），疱瘡守五十・札百・守百	
16	元禄14年（1701）３月12日	島津綱貴（弐百疋），御前様（百疋），又八郎（弐百疋），清純・久東・お菟姫・吉貴奥様・陽和院・知性院（各百疋），亀姫（銀拾弐匁），満姫（三百文），鳥居忠救奥方（百疋），奥方おまん（銀壱匁），又之進（弐百疋），木脇次郎右衛門（百疋）	木下笹右衛門	柳田房深如房専意房	壱貫八百文誂初尾	御守札四人分（鳥居忠救奥方），御守（家老新納市正久珍・代参深如房・又之進代参柳田房・専意房・新納久珍代参木下笹右衛門），御守札二人分（代参所望故），御守弐百十，御札弐百十，疱瘡守二十，御□二十	
17	元禄15年（1702）３月17日	島津綱貴・久儔（各金弐百疋），久方・清純・お菟姫・久東・陽和院（各金子百疋），亀姫・祭百姫（各銀拾三匁），智性院・芝御前様・吉貴・高輪御前様・満姫・継豊（各金子百疋），三田淡路守御前様・御方・御増（各銀子三両），鳥居忠救奥様・御栄（金子百疋），代参快心房（銀子七匁），吉貴代参米良八之丞（金子百疋）	吉貴代参米良八之丞	快心房	外誂初尾少々有	御守札壱対宛（鳥居家），外御守札一対（於方，初尾不参），守（代参快心房），守札一対（吉貴代参米良八之丞），御守（家老島津勘解由），疱瘡守七十一，長日札百七十一	家老島津勘解由より御状到来（例年之通御守進之外，誂初尾少々有）
18	享保20年（1735）３月25日	竹姫・□□・継豊・宗信・菊姫（各金弐百疋），継豊母（百疋），益之助・菊姫（各金弐百疋）	二階堂林左衛門	秀伝房		守札十包	

【表２】諸檀御代参之帳

No.	年月日	初尾等奉納者	代参者	代僧	奉納品	守・札等	備考
1	貞享４年（1687）極月26日	島津綱貴	相良源蔵		御日録・紗織三巻		江戸芝屋敷にて綱貴の継目の御礼を勤める
2	貞享５年（1688）３月３日	島津綱貴・吉貴・久儔（初尾壱部金六切），綱貴祖母（初尾金弐分），御部屋様・光久御姫様（各初尾金壱分）医者下河辺玄益（立効丸薬壱包・心経二巻）		観正		秘仏・長日ノ御札（綱貴・吉貴・久儔・光久・光久御前様・御部屋様・御姫様），秘仏（家老肝付主殿久兼），守・長日ノ札（六墨女中衆・医者下河辺玄益），秘仏（代参観正），疱瘡守三十	光久当年は初尾遣わさず，家老肝付久兼よりこの度状を給わる．
3	元禄２年（1689）３月13日	島津綱貴・吉貴・久儔・忠直（各初尾金弐分），光久御前様（金壱分），かつ姫（金弐分），おへ屋様（金壱分）		行玄房		秘仏・長日ノ札一墨ずつ	秘仏（家老種子島蔵人久時・行玄房へ）
4	元禄３年（1690）３月18日	島津綱貴・吉貴・久儔・忠直（各金子弐分），御前様（金壱分）・かつ姫（金弐分），おへや様（金壱分），亀姫（銀十弐匁）	有川十郎左衛門・木場納右衛門	亮雲	金壱両（疱瘡立願のため，有川・木場・亮雲より），銀三十匁（惣家中より），散銭・心経（下河辺玄益より）	秘仏・長日護摩札（八墨ずつ）	家老島津大学忠守
5	元禄４年（1691）３月13日	島津綱貴・吉貴・久儔・忠直（各金弐分），御前様（金壱分），かつ姫（金弐分），御へ屋様（金壱分），亀姫（銀十二匁），代参秀伝（金壱分），下河辺玄益（観音経一巻・十三銭・立効丸）		秀伝		秘仏・長日護摩札（綱貴・光久・吉貴・久儔・忠直・御前様・かつ姫・御へや様・亀姫），御立願成就御札（綱貴），秘仏（家老島津大学忠守・島津縫・主水代参秀伝），守・札（下河辺玄益），御願（二十枚所望），長日札（二十枚所望），守（五十所望）	光久初尾物を遣わさず，代参僧の差し図により秘仏・長日護摩札を差し上げる
6	元禄５年（1692）３月24日	島津綱貴・吉貴・久儔・忠直（各金弐分），御前様（金壱分），かつ姫（金弐分），おへや様（金壱分），亀姫（銀拾弐匁），家老島津玄蕃（金弐分），下河辺玄益（心経・立効丸・十三文）・惣（鳥目壱貫文）		利忍房		秘仏・長日札（光久・綱貴・吉貴・久儔・忠直・御前様・おへや様・かつ姫・亀姫・奥方），御立願成就御札（奥方），秘仏（家老喜入又兵衛久亮・島津玄蕃），長日札（下河辺玄益），長日札（五十九枚），御願（四十三枚），疱瘡（三十五），秘仏（使僧利忍房）	
7	元禄６年（1693）３月18日			深及房	初尾金惣〆弐両三分拾二匁壱貫文	秘仏・長日札（光久・綱貴・吉貴・久儔・忠直・久方・御前様・御へや様・かつ姫・亀姫・信証院），秘仏（代参深及房），秘仏（家老島津中務久輝），疱瘡守（七十），護摩札（九十枚），御願（弐拾枚カ）	忠直今年は初尾を遣わさず．
8	元禄７年（1694）４月朔日			蘭雪房	初尾金三両・銀子拾弐匁	秘仏・長日札（光久・綱貴・吉貴・久儔・忠直・久方・御前様・お奥様・亀姫・とよ松・御へ屋様・御懐様・御長姫），長日札（下河辺玄益），秘仏（代参蘭雪房），秘仏（家老祢寝孫左衛門清雄）	
9	元禄８年（1695）３月14日	島津綱貴・久儔（各初尾金弐百疋），久方・光久室陽和院・若御前様・御部屋様・祷姫様（各初尾金百疋），亀姫（白拾弐匁）・誂初尾（六百文）・下河辺玄益（十三文・薬・心経）		雅荘房		秘仏・御札（綱貴・吉貴・久儔・忠直・久方・陽和院・綱貴ノ奥様・御部屋様・亀姫・豊松・祷姫）	

【史料一】

一壱束壱本　松平薩摩守様（島津綱貴）

是者清澄寺継目為御礼献之、則江戸柴之御屋敷ニ而継目ノ御礼相勤之、極月廿五日・同廿六日御使者としてサガラ源蔵殿御目録紗織三巻頂戴之候、

貞享四年卯極月廿六日[6]

諸檀御代参之帳の冒頭部分であるが、これによれば島津綱貴が清澄寺に継ぎ目のお礼として壱束壱本を献じた。それは江戸にある島津家の芝屋敷にて継ぎ目のお礼（家督継承に関する何らかの儀式か）を清澄寺が勤めたことによる。極月二五・二六日に相良源蔵が使者として目録と紗織三巻を奉納したというものであろう。

綱貴はこの年七月二七日に祖父光久の譲りを受けて藩主となり、八月七日には将軍徳川綱吉に襲封を謝し、太刀・時服・馬代白銀等を献上している。そして一二月二五日には、左近衛少将に転任している[7]。このことから、「継目」というのは、光久から綱貴へ藩主が替わったことを指すものと思われる。

それでは島津氏と清澄寺との関係は、何時いかなる契機で始まったのであろうか。【表2】の初尾等奉納者を見てみると、綱貴以降の人物が多く見えるのに比べて、綱貴より前の世代としては、前藩主光久の名が見えるだけである。しかし、備考の欄にあるように、光久は初尾物を遣わしていないが、特別に守札等を授与すると記されている（No.2・5）。あるいは、「□□僧御差図ノ故ニ上ル也」などとあり、本史料を見る限り、光久の場合どちらかというと積極的に初尾を奉納するという事はなかったようである。

また綱貴は慶安三年（一六五〇）庚寅一〇月二四日の誕生であったが[8]、虚空蔵菩薩は丑・寅年生まれの人の守本尊とされ、この干支に生まれた人が開運・福徳増進を願って虚空蔵寺堂に参詣した[9]。綱貴は自らの守本尊として、虚空蔵を篤く信仰していたことから、本史料に見えるように、毎年清澄寺に初尾等を奉納したのであろう。

綱貴の父綱久は寛永九年（一六三二）の中年生まれ（綱貴が藩主となった時には、既に死去）、祖父の光久は元和二年（一六一六）の辰年の生まれであった事[10]と現存する史料から考えると、島津氏が清澄寺と関係を有するようになったのは、綱貴の代からであった蓋然性が高いように思われる。

奉納者　奉納者は島津家当主綱貴を中心にして、彼の妻・子息、祖母・叔母等に及んでいる。奉納にあたっては、居住地を単位として奉納されることが多かった、例えばNo.2には、「江戸桜田ノ上御屋敷」として綱貴・吉貴・久儔、「高なわの御屋敷」として綱貴の祖母・御部屋様・光久の姫の三人が上げられている。No.13には、綱貴以下五人が「御一所」、陽和院以下二人が「御一所」、御前様以下二人が「高輪御屋敷」、御前様が「芝御屋敷」、鳥居忠救以下五人が「八町堀御屋敷」とある。またNo.17には、芝に綱貴以下六人、高輪に陽和院以下四人、芝に御前様、高輪に吉貴以下四人、三田淡路守御前様以下三人、鳥居忠救奥様以下二人とある。鳥居忠救の妻は綱貴の妹かつ姫であった。これは恐らく婚姻前に信仰していた虚空蔵を、婚姻後も新たな家族を含めて信仰を継続していたものであろう。

奉納者には島津家の人物だけではなく、奉納に関与した江戸在住の家老、医師下河辺玄益等の名が見える。また清澄寺への初尾等の奉納は、

代参者や代参僧等が奉納者に代わって行っていた。

授与物　初尾の奉納に対して守や札等が授与された。基本的には、奉納に対して授与されたが、中には光久のように奉納していないのに授与される場合もあった。その他、守や札が大量に授与された例がしばしば見受けられる。例えば、守・長日ノ札・疱瘡守三十（No.2）、御願（二十枚所望）・長日札（二十枚所望）・守（五十所望）（No.5）、長日札（五十九枚）・御願（四十三枚）・疱瘡（三十五）（No.6）、疱瘡守（七十）・護摩札（九十枚）・御願（弐拾枚カ）（No.7）、疱瘡守五十・札百・守百（No.15）、御守弐百十・御札弐百十・疱瘡守二十・御□二十（No.16）、疱瘡守七十一・長日札百七十一（No.17）等がそれである。[11] No.2に女中衆の名が見えるように、これらの守や札は家中の者達へ配られたものであろう。ここでは、疱瘡の守が多く見られることに注意しておきたい。

ちなみに、本史料には島津氏以外の檀那も多く見られるが、初尾の奉納に対して、疱瘡の守を受け取っているのは島津氏だけである。

二　一紙文書

続いて【表1】のNo.1から91までは殆どが一枚ものの文書群で、いわゆる一紙文書と呼ばれるものである。今これらを形態によりA・B・C・Dの四つの形式に分類する。それぞれのタイプ毎に内容を検討してみよう。

（1）【Aタイプ】

【史料二】（島津家祈祷依頼につき書状）[12]

一筆致啓達候、松平薩摩守（島津忠豪）為祈祷虚空蔵江如例年代僧遣筈候得共、差支候訳有之最華迄別紙之通致奉納候間、宜御懇祈御札守等被遣候儀頼存候、恐惶謹言、

六月三日　　山岡市正

清澄寺　　久澄（花押）

（包紙）
「安永六年丁
酉六月廿三日
安房
清澄寺　　山岡市正」

書状の内容は、清澄寺の本尊である虚空蔵へ藩主島津重豪が最華[13]を奉納するので、懇ろの祈祷と札守等の授与を依頼したものである。

次にこのタイプの文書の発給者の役職を明らかにするために、【表1】の中から発給された年月日が明らかな差出人を抽出すると、島津大蔵久明・山岡市正久澄・喜入主馬久福・島津左中久金・市田勘解由盛常・川上美濃久芳・調所笑左衛門広郷・赤松主水則甫・島津将曹久徳・川上筑後久封等が上げられる。次に、彼らが文書を差し出した年月日に就いていた役職を史料から探ってみる。

島津大蔵久明　『島津家国老並御用人記』（東京大学史料編纂所蔵、以下『国老』と略記する）によれば、元禄一四年（一七〇一）一〇月一一日から享保二年（一七一七）四月五日まで家老であったことがわかる。文書の発給はこの間の宝永七年（一七一〇）であるので、家老としての文書発給であった。

山岡市正久澄　『国老』によれば、「明和八年（一七七一）辛卯八月廿八日転大御目附補御側御家老」とある。安永六年（一七七七）に文書を発給した時

は御側家老であった。

喜入主馬久福　『国老』によれば、「明和六年己丑十二月朔日於御前御直ニ転大御目付補御家老」とある。文書発給はこの後安永六年であったので、当時家老の地位にあったことがわかる。

島津左中久金　『国老』によれば、「明和七年庚寅於江戸為御側御家老」とある。文書の発給は翌明和八年であるので、江戸詰の側家老であったことがわかる。

川上美濃久芳　『君家累世御城代御家老記』[14]（以下、『君家』と略称する）によれば、「文化七年（一八一〇）八月廿七日任、島津若狭伝尊命○御勝手方兼○文政八酉年於江戸久馬ト更ム」とある。文化七年八月二七日に家老に任ぜられていたことがわかる。従って、文書を発給した文政五年（一八二二）当時、家老の地位にあったことが判明する。

調所笑左衛門広郷　『君家』によれば、「九年（文化）戌八月二十五日於江戸任御家老、六十人賄料、御趣法方ノ事ヲ掌ル、御側詰元ノ如シ」とある。文書を発給した天保十三年（一八四二）当時は江戸で家老の職にあったことがわかる。

島津将曹久徳　『君家』によれば、「弘化三（一八四六）丙午閏五月廿九日、於江戸世子斉彬公代公而命之、禄千石、御側詰兼諸掛総而是迄之通」とある。これは他の箇所の表記方から考えて、弘化三年閏五月二九日に家老に任ぜられたことだと推測される。また当時江戸にいたことも判明する。文書を発給した当時は江戸において家老の職にあった。

川上筑後久封　『君家』によれば、「嘉永二年（一八四九）己酉二月十三日任、島津内匠久徳代公而命之、禄千石」とある。文書を発給した嘉永五年当時は家老の職にあった。

以上の検討から、このタイプの文書が発給された当時、発給者は江戸詰めの家老であったことが明らかとなった。単署が多いが、時に連署の場合もあった。【表1】のなかには年号が書かれていない文書も数多いが、発給者が江戸詰めの家老であった時期がわかれば、発給された年代をおおよそ推測することも可能であろう。

差し出される日付は、三月の彼岸前が最も多い。但し【史料二】は「差支候訳有之」とあることから、何らかの支障があったため三月の彼岸に祈祷の依頼が出来ず、六月までずれ込んだのであろう。

江戸から最華を安房国清澄寺へ奉納したのは代参僧と代参使者達であった。組み合わせとしては、代参僧一人と代参使者（家来）一人が多かったようであるが、代参使者二人の場合もあった。

【表1】から知られる代参僧と代参使者には、次のような人々があった。

代参僧　深音・峒観・深長・善輪

代参使者　岩元太右衛門・早川千竈（包紙のみ）・永井源六・川野善次・二階堂新十郎・野村源左衛門・角地金太郎・西助市・山内伝太郎・有川良右衛門・三原善兵衛・大迫造太・上村平助・小林中太兵衛・富田利右衛門・田中八百助・白石仲太郎・大迫善兵衛

代参僧については、今のところ他に関連史料を見出せず詳細は不明である。代参使者の内、左の三名に関しては関連史料が管見に入った。

岩元太右衛門　文政六年（一八二三）の島津桃次郎道具請取状に、「先番側役岩元太右衛門」[15]、『薩藩役職補任』（東京大学史料編纂所蔵）に江戸留守居として見える。

早川千竈　島津斉興届書に「御留守居早川千竈」とある[16]、文政四年（一八二一）三月の早川兼備届書では自らを「松平豊後守（島津斉興）使者早川千

竈[17]」と名乗っている。

小林中太兵衛　『国老』には、宝暦六年（一七五六）七月より勝手方、後に勘定奉行となった小林中太兵衛政央が見える。更に彼は寛政三年（一七九一）一二月に寺社奉行より若年寄となっている。寛政元年六月朔日の高橋種央外二名寺社奉行連署申渡書にも寺社奉行の一員として署判を据えている。[18] また同書には享保一六年（一七三一）四月と元文元年（一七三六）七月より側役となった小林仲太兵衛政一も見える。しかし、【表1】に見える小林中太兵衛は吉貴の代の代参を勤めているので、吉貴の藩主在任中である宝永元年（一七〇四）～享保六年（一七二一）の間の活動ということになるが、右に見た小林仲太兵衛政一が【表1】の小林中太兵衛と同一人物であろうか。

右の三名の事例から、代参使者には在江戸の留守居や側役などを勤めた者が任ぜられた場合があったことが確かめられた。

次に、【Aタイプ】の書状を発給させた藩主別にその発給数を集計してみると、吉貴が四例・継豊が四例・重豪が五例・斉宣が三例・斉興が一七例・斉彬が二例、不明が三例となる。前章で検討した綱貴の子息吉貴から始まり、途中宗信と重年を除いて斉彬までこの書状を発給していたことがわかる。中でも、斉興が藩主であった時に最も多く出されていた。また年代で見てみると、一八世紀の初頭頃から始まり、一九世紀の半ば頃まで継続してこの書状が出されていたことがわかる。但しこれはあくまで現存する史料からの分析であり、失われた史料も数多いものと思われる。

猶、【表1】No.24の端裏書に次のような記述が見られる。

【史料三】

追啓、例年豊後守（島津斉興）其外より金子百疋宛致奉納来候得共、当時厳敷省略中ニ付、別紙之通、相中より銀三枚致奉納候間応右候、御祈祷御札等被遣可給候、猶委細之儀者留守居所より及御掛合候、以上、

例年であれば、島津斉興その他より金子百疋宛を奉納していたが、財政を厳しく制限している最中であるので、相中より銀三枚を奉納すると述べている。本史料を発給した家老は町田久視であるが、当時は調所広郷が主導する天保の財政改革が進行中であった。[19] 虚空蔵に対する信仰も聖域ではなく、ここにも財政改革のメスが入れられていたことが知られる。

（2）【Bタイプ】

【史料四】（島津家最華金寄進目録）[20]

（端裏書）
「文化元年三月十五日山着」
最華金百疋宛
松平豊後守（島津斉宣）
隠居
松平栄翁（島津重豪）
豊後守
奥方
豊後守嫡子
松平又三郎（島津斉興）
豊後守妹
壱人
豊後守弟
島津諸之丞（久明）

豊後守三男
島津寛二郎（忠公）

豊後守娘
弐人

豊後守
実（斉宣の娘）
母

島津斉宣以下の一〇人の祈祷料奉納目録である。端裏書から文化元年（一八〇四）三月一五日に清澄寺に到着したことがわかる。最華金百疋ずつを島津斉宣以下の人々が奉納している。【Bタイプ】に名前を載せるのは、藩主とその両親、藩主の奥方、藩主の子供達であった。【Aタイプ】で祈祷の依頼を行い、【Bタイプ】はそのために奉納する最華金の内容を細かく記した目録であるといえる。【史料二】の「別紙」に当たるのが【Bタイプ】の文書であろう。つまり、【Aタイプ】と【Bタイプ】をセットにして、島津家から清澄寺へ提出されたものと思われる。

（3）【Cタイプ】

祈祷料の請取状である。このタイプは更に二つに分けられる。

【史料五】（島津斉興祈祷料落手に付書状）（【表1】No.78）

貴翰致拝見候、従
大守様（島津斉興）為御祈祷虚空蔵江御最華奉納被遊、別録之通、慥ニ落手仕、則
備宝前致精誠懇祈、御札守進献之仕候、恐惶謹言、
三月十六日　清澄寺
快雅（花押）

猪飼央（高敏）様
調所笑左衛門（広郷）様

【史料六】覚（島津斉興他一六名祈祷料落手に付書状）（【表1】No.77）

覚

一金百疋　松平豊後守様（島津斉興）
御隠居
一同　松平栄翁様（島津重豪）
御隠居
一同　松平修理太夫様（島津斉宣）
松平豊後守様
一同　御奥方様
松平豊後守様御嫡子
一同　松平邦丸様（島津斉彬）
松平邦丸様
一同　御縁女様
松平豊後守御男子
一同　御壱人様
松平豊後守様御娘
一金弐百疋　御弐人様
松平栄翁様御男子
一同　御弐人様
松平栄翁様御娘
一同　御弐人様
松平修理太夫様御男子
一金百疋　御壱人様
松平修理太夫様御娘
一金弐百疋　御弐人様
右之通、慥ニ致落手候、
以上、
丑三月十六日　清澄寺

薩州
御使者中

【史料五】は清澄寺快雅から猪飼・調所等家老に対して出された最華金の請取状である。【Aタイプ】の祈祷依頼に対する請取状といえる。一方【史料六】は、形式としては【史料四】に対する請取状と捉えられ、【史料五】の「別録」にあたるものが【史料六】であろう。【史料五】が家老に対して出されているのに対して、こちらは使者に対して出されているところに違いがある。このことから、【Bタイプ】の文書は、代参の使者が発給したものと推測される。また【史料五】は差し出しが清澄寺住職の名であるのに比して、【史料六】は清澄寺と記すだけである。

(4)【Dタイプ】

最後のDタイプとは、A・B・Cの三タイプに当てはまらない文書で、清澄寺が薩摩藩からの代参をもてなした際の献立になる。庫裏にある通称「使者の間」という客室が島津家からの代参使者の休息所に充てられた部屋といわれている。[21]

三　虚空蔵と疱瘡と彼岸

前章までの考察で、島津氏が清澄寺の虚空蔵に篤い信仰を寄せていたことが確かめられた。

次に考えなければならないのは、島津氏が清澄寺の虚空蔵に信仰を寄せたその意味についてであろう。具体的には、三月の彼岸に虚空蔵に対して初尾を寄進し、疱瘡の守を受け取るその歴史的意味が何なのかという事である。

この問題を考えるのに参考となる史料が次に掲げる系譜である。

【史料七】平姓宮之原氏系譜[22]　通直の項

○同(嘉祥)十三癸未正月十五日、蒙為　重豪公御代参、可詣安房国清澄寺・常陸国村松山・奥州会津柳津三所之虚空蔵之　命、先例乎御小納戸勤之、然今般因　賢慮所　命也、越三月十九日発芝邸、行歴覧名勝古跡、詣于三所、四月二十日還芝邸、復　命、

すなわち、宝暦一三年（一七六三）正月一五日に島津重豪の代参として、宮之原通直が安房国清澄寺・常陸国村松山・奥州会津の柳津の計三ヶ所の虚空蔵に詣でるよう命を受けた。先例では小納戸役クラスが勤めるべきであるが、今回は重豪の賢慮によって命ぜられた。三月一九日に芝邸を出発して、名勝古跡を廻りながら三所に詣でて、四月二〇日芝邸に帰り復命したとある。

常陸国村松山は現在の茨城県那珂郡東海村村松に所在し、村松山日高寺と号して、虚空蔵尊を本尊とする真言宗寺院である。大同二年（八〇七）空海の開基と伝え、また大同年中慈覚大師により開かれた三虚空蔵の一寺とする。江戸時代には徳川家康から朱印五〇石を受け、徳川光圀は天和二年（一六八二）堂塔伽藍と虚空蔵尊を修繕、貞享三年（一六八六）にも虚空蔵尊を修理させた。三月に行われる十三詣での行事が盛んで、数え年一三歳の子の厄を払い、知恵を授けてもらうため参拝する者が多い。[23]

村松山虚空蔵堂

また、奥州会津の柳津とは、福島県河沼郡柳津町柳津にある円蔵寺の本尊虚空蔵菩薩[24]のことを指す。日本三虚空蔵の一つとして参詣客が多い。もと法相宗であった

が、南北朝期に臨済宗となり現在に至る。蘆名氏の代から多くの寺領を有し、豊臣氏・蒲生氏・加藤氏・保科氏・松平氏等代々の権力者から寺領を賜った。只見川の大洪水や会津大地震等の天災で大きな被害を被った。かつては三六坊の子院があったが、化政期には柳本坊・塔之坊・岡本坊・杉本坊・月本坊・桜本坊があり、六供坊と呼ばれた。十三参りや七日堂裸祭等が著名である。[25]

そして【史料七】で注目すべきは、このような代参は通常、小納戸クラスの武士が勤めるべきところであるが、今回は重豪の「賢慮」により、特別に御側御用人役・市来地頭職[26]である宮之原通直が勤めた点である。「賢慮」の理由が何であったのか。詳しいことは分からないが、その理由の一つに重豪が延享二年（一七四五）乙丑一一月七日に誕生した[27]ことが関係していると思われる。既述のように、虚空蔵は丑・寅年生れの人の守本尊とされた。この干支の人は開運・福徳増進を願って虚空蔵堂に参詣した。重豪は自らの守本尊として虚空蔵に対し特別な思い入れがあったのであろう。[28]

右のように清澄寺・村松山・柳津の三虚空蔵に参詣した事例がもう一例見られる。それは日向国佐土原から文化九年（一八一二）に廻国の旅に出た修験者野田泉光院の『日本九峰修行日記』[29]である。

【史料八】『日本九峰修行日記』

（文化十二年）三月一日　晴天。先達て願い上置候回国年延べ来丑より辰の年迄四ケ年相済み、御礼申上ぐる、且又御疱瘡御満願に付日本三虚空蔵御代参仰せ付けられ御受申上ぐる、御心付として白銀下し置かれる、御礼申上げる。（中略）

（閏八月）廿二日　晴天。（中略）此処より日本三虚空蔵の一ケ所柳い津と云ふに行く道分る、葵村弥吉と云ふに宿す。

廿三日　霧天。（中略）柳津村へ行き夕方着く、虚空蔵堂南向、十間四面、山中掛け作り、舞台あり十四間、下に大川流る、本堂の東に三重の塔、外に堂多し、川岸には旅籠屋数多し、本坊円蔵院と云ふ済家禅寺也。此節の代参の趣き役僧に申入れ候へば早速洗足の水等出し、客寮へ引入れ、即時昼食等出づ。夫より乞食行脚の形体を改め錫掛等を着し、御初尾差上る。今晩は一宿せよと申さるゝに付其積りにす、当所納経奉納。一句、

柳い津や其名も山も紅葉川

廿四日　雨天。朝於本堂和尚理趣盆を操り祈念あり、予も列座にて祈念読経す。祈念相済み札渡さる、寺へ帰り直ちに料理出る、昨夜より今朝迄一汁三菜昼食弁当迄渡る。（中略）

（十一月）三日　雨天。（中略）村松三虚空蔵の方へ赴く。（中略）村松に暮時着、水戸城下より東六里の海浜にて人家多し、宿坊龍光院と云ふへ着く、薩州宿坊也。衣体等改め、御初尾差上げる、座付茶菓子夕飯一汁二菜、夜食も出る、翌朝二汁三菜料理出る、後に御札守等渡る。本堂八間四面、南向、楼門仁王を安置す、当所も納経す。（中略）

（文化十四年二月）十二日　晴天。（中略）夫より三虚空蔵の一ケ所清澄寺へ上る。海辺往還筋より山中に上ること一里半、門前茶屋多し、清澄寺夕方着、案内申入れ客座に着く。初尾未だ上げざる内と奉納したる後と挨拶取持ち甚相違しおかしき事共段々あり略す。一宿。

十三日　大雨天。朝茶菓子等出る。団子を吸物椀に盛り、小皿に大白黄な粉、猪口に煮しめ出づ。珍らしき出し様也。相済み本堂へ詣で祈念

の上札守等渡る。本堂九間四面西向、護摩壇二面、大壇四面、荘厳也。納経し寺へ帰り二汁五菜の料理出たり。朝暮同断、奉納一句、

大空に色満つ花の御山哉

昼時下山す。（下略）

文化一三年（一八一六）三月一日、江戸の佐土原島津家の屋敷で、主君島津忠持から「御疱瘡御満願に付、日本三虚空蔵御代参仰せ付けられ、御受申上ぐる、御心付として、白銀下し置かれ」た。その後の記事を辿っていくと、閏八月二三日に柳津の虚空蔵、一一月三日に村松の虚空蔵、翌文化一四年三月一二日に清澄寺の虚空蔵に代参している（三月の彼岸前であることに注意）。柳津には旅籠屋が多く、村松山には龍光院という薩摩の宿坊が、清澄寺の門前には茶屋が多かったとあることから、当時この三虚空蔵には多くの参拝客があったと思われる。特に龍光院という薩摩の宿坊の存在は、ここに薩摩藩から定期的に代参の使者が派遣されていたことを推測させる。[30]

野田泉光院は柳津で「乞食行脚」の格好を改め、大名の代参としての威儀を正すため錫掛（篠懸）を着した。参拝先では茶菓子や料理で手厚くもてなされ、果ては弁当まで持たされている。特に清澄寺では、初尾を奉納する前とした後とで寺僧の接し方が「甚相違しおかしき事」と書かれている。初尾を奉納し、札・守を寺から授与された。

三虚空蔵に代参した事例は、今のところ右の二例しか見出せない。[31]ここで問題となるのが、三虚空蔵に代参使者を派遣するのが、恒例であったのかどうかということである。清澄寺には長期間にわたって定期的に代参使者を派遣していた史料が存しているが、柳津と村松山はどうであったのか。現段階では史料不足で何とも結論めいたことは言えないが、泉光院が三虚空蔵への代参を命ぜられた「御疱瘡御満願に付」という理由に注目したい。【史料七】で重豪が「賢慮」で以て特別に命じた三虚空蔵への代参も自らが丑年生まれであったことの他に、泉光院と同様の理由があったのではなかろうか。従って、右の二つの史料から言えることは、三虚空蔵へ代参の使者を派遣するというのは「御疱瘡御満願」という特別な場合のみに限られていたと推測できよう。

前章までの考察と合わせて考えてみると、一七世紀末から、島津家において三月の彼岸の時期に疱瘡祈願のために安房国清澄寺の虚空蔵に祈願することがほぼ毎年定期的に行われていた。この他、特別な疱瘡祈願が満願を迎えた時、清澄寺に加えて日本三虚空蔵の残り二ヶ所である会津の柳津の虚空蔵と常陸国村松山の虚空蔵に代参の使者を派遣していたことが明らかとなった。[32]

ところで、疱瘡と結びついた虚空蔵信仰は島津氏だけのものではなかった。天保一四年（一八四三）成立の『三国名勝図会』に、疱瘡と虚空蔵の関連性を窺わせる記述が存する。[33]

【史料九】『三国名勝図会』巻之二十一「指宿」

安泰山源忠寺（中略）○虚空蔵堂（中略）当寺の境内にあり、此像は、往古漁人海中より得しといひ伝ふ、痘瘡等に祈願すれば霊験ありとて、近郷よりも参詣する者多しとぞ、

【史料十】『三国名勝図会』巻之二十七「久志秋目」

虚空蔵堂（中略）久志村にあり、此虚空蔵は、疱瘡の願に霊応ありとぞ、小児の未だ痘を病ざる者は、其軽きを祈り、既に痘を歴し者は、報賽なりとて、春秋の彼岸、参詣する者甚た多しとかや、

右の二つの史料から、一九世紀半ば頃の薩摩半島南部のある地域では

疱瘡祈願のために虚空蔵に参拝する風習があったことが確かめられる。特に【史料十】では春秋の彼岸に参拝されていたことも確認できた。[31]

このような風習は、形を変えて近代以降も継続して行われてきた。鹿児島での疱瘡神をめぐる行事には①「疱瘡団子作イ」、②「疱瘡踊イ」、③「疱瘡勧進」の三種が知られる。この内①が虚空蔵と関連する行事である。南九州市知覧町東別府・飯野、南さつま市加世田武田・内布等旧川辺郡・加世田市・日置郡の一部等薩摩半島の南部で見られる行事である。春の彼岸に主婦達が米を臼で搗いて粉にし、指頭大の団子にしてゆでたホソンダゴ（疱瘡団子）を作り、子供達を連れて虚空蔵参りをする。虚空蔵は疱瘡の神様だと言われている。その虚空蔵を拝み、皆でホソンダゴを食べ疱瘡の軽いことを祈る。[32]

小野重朗氏はこの風習について、「彼岸の神仏参拝という一般的な行事が、疱瘡の軽いことを神仏に祈るという方向に特殊化したものと思われる。いわば疱瘡民俗の一つが発生したばかりの姿が、ここにみられるといってよい」と評価される。[33]

ところで、中村雅俊氏は坊津一乗院の虚空蔵信仰が疱瘡と関連性が深いこと、後にこれが琉球に伝播していったこと、更に一乗院に虚空蔵信仰を伝えたのは紀伊国根来寺であったこと等を指摘している。そしてこれら三者間の伝播を可能にしたのは、真言宗の存在であったと結論づけている。しかし、中村氏の議論は問題をやや単純化しすぎている嫌いがあり、一概に首肯できるものではない。また一乗院の虚空蔵信仰が疱瘡と関連性があるということも俄に従いがたい。[34]

一方、佐野賢治氏は南薩地方の虚空蔵信仰の事例を広く蒐集して、それが製鉄の伝承と関係しながら疱瘡の神として村内で祀られている例が多いことを紹介している。[35]

以上、南薩地方の虚空蔵信仰が疱瘡除けと関係が深いことの理由や、その始原について幾つかの説を紹介したが、未だはっきりわからないというのが現状である。

春の彼岸に疱瘡の軽いことを願って虚空蔵に参拝するという風習の祖型は、実に一七世紀末にまで遡ることになる。この風習を江戸で実践していた近世の島津家は、中世では伊作島津家と呼ばれる庶流で、戦国時代に頭角をあらわして、やがて本家に代わって、実力で島津家当主の座についた。伊作地方は小野重朗氏が作成された民俗地図の「ホソンダゴツクイ」が分布している地域に入っている。従って可能性の一つとして、もともと伊作地方を含んだ南薩地方で行われていた風習を伊作島津家が取り入れて、それを近世になって江戸で実践していたのかもしれない。

あるいはこれとは反対に、江戸でこの風習を身につけた島津家が、薩摩藩内に持ち込み、それが幕末頃から民衆にも次第に浸透していったという推測も可能かもしれない。しかし、このように考えると、「疱瘡団子作イ」という風習が南薩地方だけに分布している状況を合理的に説明することが出来ない。藩主が持ち込んだものであれば、南薩地方という一地域だけに伝播するのではなく、他の地域にも同様に伝わっていいはずだからである。

いずれにしろ、この分野はまだまだ不明な点が多く、わからないことだらけである。今後も史料蒐集を継続して行い、幅広い視点からの考察が求められると思う。

むすびにかえて

以上、本稿の考察で明らかになった点をまとめておきたい。

①島津家と清澄寺との関係の嚆矢は、現存する史料からみて、貞享四年（一六八七）一二月二六日で、藩主は綱貴の頃からである。これ以降、宗信と重年を除いて幕末の斉彬の時代まで、ほぼ毎年の三月彼岸の時期に清澄寺に初尾を寄進し続けた。

②虚空蔵は丑・寅年生れの人の守本尊とされ、この干支の人が開運・福徳増進を願って虚空蔵堂に参詣した。このことから考えて、綱貴が清澄寺とそもそも関係を有するようになった契機は、史料不足で明確な事は不明であるが、清澄寺の本尊である虚空蔵に対して、慶安三年（一六五〇）寅年生まれの彼が、自らの守本尊として特別に信仰を寄せていたからかもしれない。また、清澄寺・村松山・柳津の三虚空蔵に家臣を参拝させた重豪は、延享二年（一七四五）丑年生まれであったことから、彼も虚空蔵を守本尊として篤い信仰を寄せていた可能性がある。

③寄進を行ったのは藩主とその両親・祖父母、藩主の妻と子供達であった。寄進は、居住地毎にまとまって行われた。子供達の内女子は、婚姻先でも夫や子供等と連名で清澄寺に初尾を寄進する者もいた。また医師や代参使者・代参僧等も寄進をすることがあった。

④寄進に対して、秘仏・長日護摩札等が授与された。また疱瘡の守・札等が大量に授与されている例があるが、これらは家臣達に配布されたものであろうか。【表2】のNo.4にあるように、「疱瘡立願」のための寄進であったことが確かめられる。

⑤寄進に際しては、在江戸の家老から書状形式で虚空蔵への祈祷依頼と初尾の寄進が伝えられ（【Aタイプ】）、それに添えて初尾の細かい内訳が書かれた文書も清澄寺へ提出された（【Bタイプ】）。これに対し清澄寺側では、請取状を二つ出している（【Cタイプ】）。一つは【Aタイプ】に対するもので清澄寺の住職の名で島津家の家老に宛てられている。もう一つは代参の使者に宛てたものである。

⑥清澄寺の他に村松山と柳津の日本三虚空蔵に初尾を寄進した事例が二例見られた。清澄寺に対しては長期間にわたって継続的に寄進が行われた痕跡があるが、後の二者には今のところそれが見られないことから、疱瘡祈願が満願を迎えるなど特別な場合にのみ寄進が行われたと考えられる。但し、この点は村松山と柳津の充分な史料調査を実施していないので、今後の調査の状況次第では変わる可能性がある。【史料八】にあったように村松山には龍光院という「薩州宿坊」の存在が確かめられるので、薩摩藩からの継続的な参拝が行われていた可能性もある。

⑦春の彼岸に疱瘡にかからないように虚空蔵に祈願する風習は、幕末に至り南薩地方の一部で民衆の中にも見られた。やがてその風習は、近代以降疱瘡が無くなってからも「疱瘡団子作イ」という風習となって南薩地方に残存した。彼岸と疱瘡除けが強烈に結びついていたからであろうが、幕末になって種痘が実施されるようになってからも、春の彼岸に種痘を接種した事例が見られた。

以上、安房国清澄寺に残された島津家から発給された文書を手がかりにして、島津氏の虚空蔵信仰について考えてみた。清澄寺と島津氏がこれほど密接な関係を有していたこと等、従来鹿児島では全く把握されていなかった問題であった。また、村松山や柳津の虚空蔵との関係、疱瘡

と虚空蔵との関係など新たな問題が次々と出現してきたが、本稿では充分に論じ尽くせなかった。今後も継続的な史料蒐集に努めて、この問題を考えていきたいと思う。

註

（1）清澄寺文書の一部は、天津小湊町史編さん委員会編『天津小湊町史史料集1』天津小湊町、一九九〇年に翻刻されている。

（2）清澄寺本尊寄進状（『天津小湊町史史料集1』一七四号）。

（3）日本三虚空蔵の組み合わせについては諸説あるが（村松山虚空蔵堂創建千二百年記念実行委員会編『村松山虚空蔵堂創建千二百年記念村松山虚空蔵堂縁起』一四～一七頁参照、村松山虚空蔵堂、二〇〇七年）、『日本九峰修行日記』（『日本庶民生活史料集成第二巻』三一書房、一九六九年）では、清澄寺と会津柳津の虚空蔵と常陸国村松の虚空蔵を合わせて「日本三虚空蔵」と呼んでいる。この三虚空蔵に関しては、空海にまつわる説話がある。入唐中の空海が帰朝の際、三鈷と愛樹を海に投じた。このうち愛樹は紀州熊の浦（那智の浦）に漂い、さらに安房国天野浦に漂着した。空海は帰朝後、この霊木に会い、これを元・中・末に三分して、仏地有縁の地を求めるため再び海に投じた。元木は安房国清澄に漂い至ったので、この地に能満虚空蔵を刻んだ。中木は常陸国村松に着いて大満虚空蔵を刻んだ。末木は越後国に流れ着いたが、雌雄の白蛇が会津川を遡ってこれを柳津まで運んだ。この後、末木を探していた空海は柳津でこの木と出会い、福満虚空蔵を刻んだという（柳津町教育委員会編『柳津町誌上巻』福島県鹿沼郡柳津町、一九七七年）。

（4）『角川日本地名大辞典13千葉県』角川書店、一九八四年・『天津小湊町史史料集1』・『日本歴史地名大系第12巻千葉県の地名』平凡社、一九九六年・天津小湊町史編さん委員会編『ふるさと資料天津小湊の歴史上巻』天津小湊町、一九九八年）。

（5）これらの島津家発給文書は、前掲の『清澄寺什宝録』に「島津公代々ノ状　数通」と見える。

（6）『天津小湊町史史料集1』二二九号。

（7）『島津氏正統系図』。

（8）同右。

（9）佐野賢治「虚空蔵信仰の研究成果と課題」（同編『虚空蔵信仰』雄山閣出版、一九九一年）。

（10）前註（7）。

（11）これらの札や守がどのようなものであったのか、現物が残っていないので確かなことはわからないが、清澄寺での原本調査の際、「四三月廿三日／薩摩殿□／ほうそう／守／御守護（見消にて抹消）」と書かれた包み紙を見出した。包みの中には何も入っていなかったが、このような紙の中に守が包まれていたのであろう。また、別の事例として佐々木文書（個人蔵・黎明館寄託）のなかに、佐々木宮内が近江国武佐郡中村に社参の時、拝受した「疱瘡之御守」が残っている。それは「佐々貴大社牛玉御札／大神右京進」と書かれた包み紙のなかに、同社の国家安全の札と牛王宝印が納められている。

（12）『天津小湊町史史料集1』二三二号、【表1】No.9。

（13）『日本国語大辞典（縮刷版）第8巻』によれば、最華は「はつお」と訓み、「初穂、早穂、最花、初尾」等の漢字をあて、「神仏へ奉納する金銭、米穀など」の意とある（一〇一二頁）。

(14)『鹿児島市史Ⅲ』所収。
(15)『鹿児島県史料旧記雑録追録七』一九一一号。
(16)『鹿児島県史料旧記雑録追録七』一七五一の二号。
(17)『鹿児島県史料旧記雑録追録七』一七九五の二号。
(18)『鹿児島県史料旧記雑録追録六』二八〇四号。
(19)芳即正『調所広郷』吉川弘文館、一九八七年。
(20)『天津小湊町史史料集1』二三三号、【表1】No.42。
(21)『天津小湊町史史料集1』六七〇頁。
(22)個人蔵、黎明館寄託。
(23)『日本歴史地名大系第8巻茨城県の地名』平凡社、一九八二年。『常陸考』(茨城県立歴史館史料部編『茨城県立歴史館史料叢書5近世地誌Ⅰ』茨城県立歴史館、二〇〇二年)。
(24)虚空蔵菩薩の縁起に関しては前註(3)を参照。
(25)『日本歴史地名大系第7巻福島県の地名』平凡社、一九九三年・『新編会津風土記巻之九十三』(『大日本地誌大系新編会津風土記四』雄山閣、一九三三年)。
(26)前掲「平姓宮之原氏系譜」。
(27)前註(7)。
(28)他に天明六年(一七八六)に重豪の内慮により虚空蔵尊像一躰を輪王寺一品后延法親王の御内道場に安置した(「島津家文書」天明六年一二月一〇日薩摩藩江戸家老御書付)事例等が知られる(『第50回記念 黎明館企画特別展徳川将軍家と島津家―名宝と海に生きる薩摩―』一六九・一七〇頁、二〇一二年参照)。
(29)前註(3)。石川英輔『大江戸泉光院旅日記』講談社、一九九七年も参照。
(30)村松山では修験道行者太田村龍蔵院が正別当瀧之坊に、龍蔵院の下(夜)住太田村龍光院が脇別当に任ぜられていた。龍蔵院は参勤交代の大名も宿舎として利用していたという(『村松山虚空蔵堂創建千二百年記念村松山虚空蔵堂縁起』三六~三九頁)。
(31)薩摩(藩)の人物で三虚空蔵の内、いずれか一または二ヶ所に参拝した事例として次のようなものがある。薩摩国大口を文禄三年(一五九四)に出発し、諸国を廻国した堀之内日限坊と平山一忠坊は同年八月から九月にかけて、柳津の虚空蔵と清住(澄)に参詣し、御経奉納を果たしている(『廻国通道日記』個人蔵、黎明館寄託)。武器調査のため関東・東北を旅していた木脇啓四郎は、嘉永五年(一八五二)四月二五日に柳津の虚空蔵へ参拝している(丹羽謙治「翻刻木脇啓四郎『巡国日記』―嘉永五年の関東・東北・越後の旅日記―」『国語国文薩摩路』第五〇号、二〇〇六年)。
(32)虚空蔵と疱瘡との結びつきの上限を明らかにすることは難しいが、一例として上井覚兼の場合を指摘しておきたい。覚兼はその日記の中で虚空蔵に対して祈念した事を記しているが、その記事は天正一二年六月一三日、同一三年三月一三日、同一四年五月一三日の合計三回で、年に一度ずつ行っていることが知られる。しかもその月はまちまちである。観音や地蔵などのように、毎月日を決めた定期的なものではなかった。また疱瘡に関する記事も散見されるが、虚空蔵とは無関係のようである(玉山成元「上井覚兼の信仰―とくに晩年を中心として―」、福島金治編『戦国大名論集16島津氏の研究』吉川弘文館、一九八三年、初出は一九六九年を参照)。

(33) 年代の明らかでない民俗行事としては、各地の郷土誌類を調べれば事例を幾つか見出せるが、ここでは年代が明らかな文献史料にのみ限って紹介する。

(34) 『名越時敏日史』文久三年三月二一日条によれば、幕末になって種痘が行われるようになってからも、春の彼岸に種痘を接種していた記事が見られる（『鹿児島県史料名越時敏史料一』）。

(35) 小野重朗「疱瘡神（ホソンカンサア）」（同『民俗神の系譜―南九州を中心に―』法政大学出版局、一九八一年）。同他『鹿児島の民俗暦』海鳥社、一九九二年）。

(36) 前掲小野『民俗神の系譜』二七二頁。

(37) 中村雅俊「虚空蔵信仰の南進―根来・薩摩坊津・琉球―」（『御影史学論集』一三、一九八八年）。

(38) 佐野賢治「疱瘡神と虚空蔵信仰」（同『虚空蔵菩薩信仰の研究―日本的仏教受容と仏教民俗学―』吉川弘文館、一九九六年）。

【附記】

郷土資料館主査の石川丈夫氏、大本山清澄寺執事長宮崎雅宣氏のお二人にはお忙しいなか調査のお願いをご快諾いただき、色々と便宜をはかっていただきました。ここに記して感謝申し上げます。また柳津の虚空蔵に関する文献をご教示いただいた福島県立博物館の佐々木長生氏、村松山の質問にお答えいただき、文献までご恵与下さった茨城県立歴史館の飛田英世氏にもお礼を申し上げます。

また清澄寺文書の所在についてご教示いただいた故島津晴久氏にも小稿を捧げたい。氏の情報提供が無ければ、この調査もあり得なかった。郷土資料館で調査をしている最中にも私を気遣って電話をかけていただいた。その後も、折に触れて調査の分析の進展を気にされていた事を思い出す。氏の生存中に調査結果をまとめることが出来なかったのが心残りである。氏の学恩に感謝しつつ、小稿を墓前に捧げ、謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

（くりばやしふみお　主任学芸専門員兼学芸課企画資料係長）